

西南の役の戦場となる

託麻ヶ原の一角を占める健軍・保田窪は西南戦争時、官・薩両軍の会戦のあったところで、秋津中無田神社には当時の弾痕が今に遺り激戦の跡をしのばせます。

西南の役といえば、田原坂ばかり有名で、ここ健軍・保田窪はその陰に隠れて今日ではほとんど忘れられているかのようなのですが、実は健軍・保田窪の戦いこそ動員された兵力の規模、白兵戦を含む戦闘の激烈さにおいて戦役中最大の激戦であったと云われています。田原坂の戦いが隘路における点の争奪戦だったとすれば、健軍・保田窪の戦いは平原に展開した線の激突で、両軍ともにその実力が試される、いかにも合戦らしい戦いでした。

薩軍右翼は大津にあり左翼は御船、この 20 kmに及ぶ戦線上の中央部、木山に本陣(陸軍大将・西郷隆盛の居所)を据え、そこから敵前へ真直ぐに延びた前線が健軍・保田窪でした。薩軍はここに長い塹壕を築き、勇猛の将桐野利秋がこれを指揮するという布陣でした。この桐野隊は薩軍の主力精鋭であり、官軍の主力、熊本鎮台、歩兵第十三連隊(連隊長・川上少佐)をさんざんに苦しめます。

以下に採録するのは『熊本市・飽託郡誌』(県立図書館蔵)に載っている漢文調の文章で、今日の読者には少し読みづらいかもしれませんが、こういう文体をかつては名文としたものです。

また、秋津支所図書館所蔵の『ふるさと秋津の歴史』も併せ抄録しました。これは官・薩両軍と地元住民との接触の記録です。往昔、戦場周辺には無数の同じような話があったはずですが、今日そのほとんどが伝わっていません。読者でその種情報お持ちの方、ご教示いただければありがたいです。

健軍の新戦場

熊本師範学校教諭 角田政治 明治三十九年

健軍神社の東、保田窪の間、薩軍熊本の困を解きて退きたれど、尚未だ進撃の策を捨てしにあらず、木山を本場として其右は折れて大津に至り、左は御船に拠り、前軍は健軍甘木の間連絡し、野津忍助は右翼大津にあり、貴島清、中島健彦は中部永嶺にあり、河野圭一郎は左翼健軍にあり、其守線五六里の間に連なり、機に乗じ再び熊本城を衝んとせり。

明治十年四月十八日官軍進撃の部署を定め、総攻撃を行んとせり、其部署は即ち熊本鎮台は健軍に別働第五旅団(大山少将之を率ふ)は保田窪に当たり、第一第二旅団(第一野津少将鎮雄第二は三好少将重行之を率ふ)は大津枯木より川窪の方面南に対し、第三旅団(三浦少将梧樓)は大津地方より豊後道に連なり、遙かに二重嶺の兵と相應し、別働第一第二旅団は隈庄より、同第三旅団は甲佐地方より、同じく御船に向ひ、全正面は両翼に至るに従て凸出し、敵を包撃し、第四旅団は立田山にありて、総軍の後援と為るべきなり。

開戦以来官薩両軍同時に大兵を用いて劇戦したるは、この役を以て第一と為す、而して中央健軍保田窪の戦闘は相連絡すと雖、右翼は御船、左翼は大津共に地形の為に限られて、独立の戦闘を為せり。

此時薩軍の精鋭は健軍保田窪の各方面にあり、十七日胸壁を砂取村、東の八丁馬場、及び健軍の左右に築きて守備を張り、將に進攻せんとす、健軍は保田窪と相並んで熊本の東面に在り、健軍は江津湖、砂取村を前にし、南御船に通じ、保田窪は小山御領村を背にして、西北立田山に対す共に要勝の地也。

官軍は熊本鎮台兵第十三連隊第三大隊を出し、左は小関村に於て第四旅団〔曾我少将祐準之を率ふ〕と相連絡し、右は砂取に於て別働第二旅団と相接濟し以て之に備へ、十九日又山砲臼砲及び工兵第六小隊を砂取に遣はし、急に砲台塹溝等を各所に築かしめ、又糧食分配所を砂取に、大包帯を九品寺に、武庫を国府に置き、各進撃の準備を為せり、是に於て両軍の激戦又起る。熊本鎮台兵の戦線は八丁馬場の右方、別働第二旅団の左翼より保田窪の左側別働第五旅団に連絡し、其長さ凡そ二十余町、廿日午前九時諸隊進みて敵壘に逼る、薩軍之を拒く猛氣蓬勃当る者摧げざるなく、樺山中佐亦傷くに至る、是に於て援兵を各戦線に増し、正午山本中尉等経塚(京塚)と保田窪の中間に於て、敵壘に突入し、又右方の数壘を陥れしかば、敵健軍に走れり、志摩大尉の隊、放火の下に潜進し、健軍を衝んとし、先づ経塚を陥れて進む、適ま左翼の敵我退路を截んとするを以て経塚に退卻せり、別働第五旅団は其右翼の一大隊、小関橋を踰へて進み、保田窪の南端に逼しに、敵は堡壘を前面の高地築くこと連珠の如く、其陣蔽固を極む、官軍正面の凸角を攻撃し、数回の攻撃を試みたるも其功を奏すること能わず、午後三時諸中隊銃鎗突撃、途に凸角の壘を抜き、勢に乗じて数壘を占領せり。

此日山県参軍は、大山少将と共に立田山に上り、戦地を巡視せり、大山少将午前九時山を下り水前寺に至り、熊本鎮台兵をして奮戦せしめ、午飯を喫し復保田窪に赴んとす、途上樺山中佐の傷きて熊本に赴くに会す、遂に再び立田山に上る、時に日已に午後一時を過ぐ、而して保田窪の戦依然として戦に苦む、大山少将参軍に謂て曰く、『今前軍援兵一二中隊を得て突進せんと請ひ来れるを以て之を遣れり』、参軍曰く『事此に至る銃鎗攻撃を除きて他に政策あるべからず』、少将曰く『彼の二中隊果して如何んの状を為す、暫く其戦況を觀ん、』已にして健軍口左翼の兵奮進して敵壘に逼り、保田窪の前面は其右翼兵二中隊を得て勇氣一倍し、進みて松原の壘に入る、是に於て保田窪前面の諸壘悉く陥る、参軍又堀江中佐をして樺山中佐に代て砂取口の兵を指揮せしむ、我兵益す進み、捷利を獲たり、時に日已に傾く、諸隊戦を収めて守備を嚴にし、山県参軍は熊本に帰れり。

諸隊戦を収むるに当り、薩将貴島清、大津新捷の精兵を率ゐ猛然として来る、其意中央突貫を行ひ、一挙して熊本を衝かんとするに在り、其兵勇往直前、白刃を揮て我中央を突き、馳驟縦横勢猛虎の怒るが如く、我軍大に乱れ隊崩れ兵潰ゆ、其諸壘悉く復敵の奪ふ所と為れり。

熊本鎮台兵は終夜苦戦して暁に徹し、未だ左翼を別働第五旅団に聯絡するに至らざるを以て、依然砲撃して黎明に至り、敵の動静を察するに、已に隊卻したりしかば、乃ち健兵を出し進みて、藤原村に至りしに大津口の各旅団既に木山町に入り、御船口の諸旅団亦船底山(船野山)に備ふ、鎮台兵、其中央福原村を守り、牙營を馬水に置き、自余の兵を健軍に屯在せり。

即ち乃木少佐の引率は難なく、城内に入ることを得たりけるが、第二第三の二個大隊は之に後れ、其の第三大隊即ち吉松少佐の一隊は、二月二十二日正午に至り、植木町に達し、本隊は中食し、前衛を出して搜索をなさしめしに、其の搜索隊が此の向坂より少しく隔りたる地に来れる時、此の地に人の彷徨するを見ぬ、然るに此方より直ちに発砲しければ、搜索隊は本隊に急報しぬ、依りて中食の本隊は直ちに往還の右側なる鉦塚村に進みけるに、薩軍は左側より其の背後に出でたれば、腹背に敵を受けたる者いかでか敵するを得んや、乱れに乱れて植木の方にぞ退きぬ、此の時第二大隊は既に枯木に着したり、然るに賊は勝ちに乗じて益々猛く、退去の官軍を追撃し、破竹の勢を以て一挙にして植木の官軍を抜き、聯隊の生命とせる十四聯隊旗は其の所在を知らざるに至りぬ、而して官軍は遂に玉名地方へ退去せり、此の戦官軍の戦死負傷甚

だ多し。

其の戦没者の墓は、往還の右側に接する処にあり、其敷二十有余、忠君愛国なる帝国軍人の魂、今何所にあるや、嗚呼一度此地に来る者誰か一掬の涙を惜む者あらんや。

西南戦争と秋田村

明治十年四月十四日と思われる。御船方面の戦いで敗れた薩軍の一部が、橋を壊しながら木山へ集結する途中、中無田を通過するとき、世話人三藤孫四郎等に、食糧の提供や道案内を強要する。賊軍への協力を躊躇していると、中無田神社に向けて実弾を発射して、村民を震え上がらせ、言うことを聞かないと火を放ち村中を焼き払うと脅されて協力させられる。



中無田神社

2010.3.12

「現に中無田神社の神殿内の柱には所謂西郷弾が打ち込まれたままになっている」



外側の板壁を貫通してご神体をお祀りする内陣の柱に弾痕

村では戦場になったら大変な事になるので、女子供を、吉住氏宅裏の、孟宗竹林内の、元鶯城跡の窪地に(当時は相当深かったような)猫伏(ネコボク)を、被って避難させた。なかには身重の婦人がいて避難中にお産があったりして、村中大変な騒ぎであった。(注・当時木山に行く道は、戸島往還より花立往還へ出て広崎の猫伏石を通過して木山に行く道しかなかった。現木山県道は明治三十三年完成。)

幸い薩軍は通過しただけであったので、戦場にはならず済んだが、それを追って政府軍が通過するときの対応が又大変であった。

四月十五日午後三時頃、熊本鎮台兵二名が三藤孫四郎を間島橋へ呼び出し、間もなく政府軍が通過するので薩軍が壊した橋三ヶ所を一時間以内に修理するように取り計らえとの命令、無理な話だが命令に従うほかはない。大急ぎで西無田用掛り矢田和三郎、下無田(通称新村)用掛り野田伝太に連絡して、大至急人夫を集め、有り合わせの板や材料を持ち寄り応急修理した。

なお、矢田和三郎は前日十四日にも六嘉方面から薩軍を追った政府軍を橋が壊れて渡れないので川船で渡したり、道案内等したりしている。

四月二十一日薩軍敗走後、村へ政府軍進入に出迎え、道案内、下無田には二十二日迄政府軍帯陣のため、宿所の手配、手伝い人夫の手配に追われている。

四月二十四日より政府軍衆が通過する際、又薩軍が焼き落とした橋の修理、渡し船の手配、

乗馬の手配等。又五月七日大津方面から隈庄への移動の政府軍の大砲等は橋が壊れて渡れないので、渡し船の手配や手伝い人夫の手配等々。又沼山津村では、熊本鎮台兵の馬水(益城町馬水)・木山(益城町木山)・御船(御船町)通過の際には数百名の手伝い人夫を出して協力している。

広安村(益城町広崎)では小倉鎮台兵が進入の際には、熊本往還筋の(地元では花立往還と言っている)猫伏石と言う所で焚き出しをしたり政府軍数千人の道案内、食糧、物品の輸送などに、多数の入夫を動員して手伝っている。

木山に集結した薩軍・党薩熊本隊は四月二十日、二十一日船野山(益城町308メートル)・飯田山(御船町431メートル)周辺の激戦に敗れ、矢部方面へ後退して人吉方面へと敗走していく。

西南戦争が終わった後、戦後処理というか、政府軍に協力した者にはなにがしかの日当が支払われた模様で、協力した内容を書いた文書の写しが残っている。文書の内容が古文で難しく分かりにくいのが、次のような文書がある。中無田では「賊徒乱入之際出夫周旋等」と薩軍が通過の際に脅されてやむを得ず協力したのだったが、賊軍の逃亡の手助けをしたと、賊軍協力の名目で日当の請求を却下されている。

戸長吉田泰造(当時は官選戸長)が再度日当下げ渡し願を、熊本権令富岡敬明殿宛に、明治十一年三月二十六日に出しているが。

それに対して「…尽力致候儀ハ人民ノ義務ト相心得夫ニ説諭致可依而書面却下候事」と明治十一年四月二日 熊本権令富岡敬明からの却下の書面である。

村ではがっかりである。婦女子や村を戦火から守るために、薩軍から脅されて協力しただけだったのに。村では政府軍のために道案内、橋の修理、船馬の周旋、輸送の手伝い等に人夫の動員、宿泊の斡旋等々莫大な出費になっていた。

戸長や用掛など当時の村の世話役連が、県と協力した多数の村民の間に立って非常に苦慮された事が窺われる。

参考文献 三藤家文書 (語りべ学習会 小田邦秀)

『ふるさと秋津の歴史・第一編』(平成13年刊)より

